

太夫格子に立名の男（井原西鶴）

駿河の國安倍川の夜の色街、青柳十藏榎坂専左衛門の二人が酒に酔つて口論し、斬合ひとなつて、十藏が専左衛門を斬り捨てた後、證據も残さず立退いた。専左衛門の弟専兵衛は事件を知つて駆けつけるが、仇の手懸りが掴めない。しかも専左衛門が掟に背いて屋敷を拔出し惡所で殺された事に主君が立腹してをり、遺族は屋敷に留る事もならず、興津にゐる知人を頼つて侘住居をする事になつた。

専左衛門の妻は七歳の一子専太郎に「父様は」と問はれる度に悲歎に暮れて死を思ふが、「我相果なば、さぞ専太郎が歎くべし。女の心のはかなや、夜を日につぎて成人させ、是非に敵をうたせでは」と覺悟を固め、女ながら息子に劍道の稽古を授け武藝に勵ませた。

専兵衛は手懸りを求め探索する裡に、ひよんな事から十藏こそ下手人と知つて敵と狙ふが、それを知つて十藏は直ちに行方を晦ます。専兵衛は十藏の郷里出羽迄捜しに行くが發見出來

ず、興津に戻り空しく年月を送る裡に、兄嫁に戀慕する様になり、「武士の義理をまかへり見ず、寢間に忍びて」執拗に口説くが、拒絶される。専兵衛は強引に床の中に潜り込む。兄嫁は懐劍を抜き放ち、「専兵衛が脇腹をさし通し、其刀にて胸をつらぬき、惜や廿四の春の世の夢とはな」つたのである。

遺兒専太郎は人々に助けられて成長し、十三歳になると敵討の旅に出る。十藏は噂を聞いて、「我、専左衛門を打て後、其まゝ切腹すべきこそ武道なれ。さもしき心底おこりて、世をしのび、人のそしりを請ぬる事もよしなし。我かたより名乗出て、子細なくうたれて、専太郎が本望をとげさすべし」とて興津に急ぐが、行き違ひで會ふ事が出来ず、已む無く、「我生國、出羽の羽黒山の麓寺、觀音院にて待べし」と興津に貼札を立て出羽に戻ると、死病に罹る。十藏は觀音院の住職に、専太郎が來たら、「たとひ白骨となる共、二たび我を掘出し、敵をうたせ給へ」と遺言して死ぬ。

やがて専太郎がやつて來る。掘出してみると、生きてゐるかの様な十藏の姿。「親の敵のからだなれば、うつ」と叫ぶと、十藏の死骸は眼を開き、笑つて首を差し出す。帶刀は刃を引きつぶしてあり、「うたるゝ覺悟の心入、ためしなき男」であつた。専太郎はもはや「恨みはなし」

とて、出家する。

「武道傳來記」中の一篇である。西鶴には「武士の義理とか世間的な顧慮とかいふものに對して、人間の自然の性情を重んじるといふ氣持があつたことは認めてよい」と或る西鶴學者は書いた。町人の西鶴が「自然の性情」に逆らふ武士の生き方を複雑な思ひで眺めてゐたのは事實であらう。實際、「武道傳來記」全篇は美談を主たるモチーフとしてはゐない。けれども、専左衛門の無様ぶざまが示してゐる通り、「自然の性情」に押流される人間を西鶴はその儘肯定してはゐない。「好色一代女」の主人公は「ほしや男をとこほしや」とて頗る奔放ほんぱうに生きるが、同時に己れを「あさましく」思ひ、「是これをそろしの世や」とも呟いてゐる。一方、専左衛門の妻は不名譽な死を遂げた夫にも貞節を貫き、十藏は死後も武士の覺悟を棄てまいとする。二人の生き方の見事は西鶴の胸を打つたのであり、さればこそ青果の様に「西鶴は眞實以外に何事をも描き得ない人」と云ひ得るのだ。小林秀雄が赤穂浪士を評して書いた様に、「自然の性情に逆ふもの、逆はなければ生きて行かれぬ思想といふもの」に取憑かれるのも武士の眞實だつたからに他ならない。だが、今や我々日本人は「自然の性情に逆ふもの」の事などちつとも氣にしてはゐないから、己れを「あさましく」とも、「是をそろしの世や」とも一向に思ひはしない。

(新日本古典文學大系七十七、岩波書店)